

# びわこの 考湖学

26

大津城主が管理する大津百艘船が集結する大津の港は東日本の物資の中継地として繁栄していました。しかし、大津城は、繁栄を謳歌し続けていたわけではありませんでした。実は慶長5(1600)年、天下分け目の関ヶ原の合戦の前哨戦の舞台となり、合戦の前日に落城し、歴史からその姿を消していったのです。

では、大津籠城戦についてみることにしましょう。

当時の大津城主は京極高次。秀吉恩顧の大名でしたが、家康とも親交は深かったのです。どちらについてもおかしくない立場といえます。まずは三成の要請に従い、加賀の前田討伐に向かったものの、その途上、大津城に取って返し、東軍に与することにしたのです。

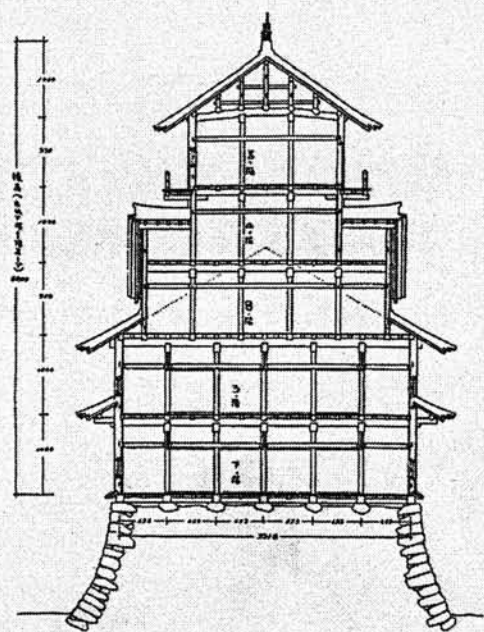
高次の行動は、「大津ノ義二世上騒シ」「前代未聞ノ儀驚キ入ルモノナリ」と公卿らに記されたように、驚き、かつ騒然とするような前代未聞の寝返りであったのです。

9月4日、高次は城下である大津町を焼き払い大津城に立て籠もりました。大津城に立て籠もった兵3000人余りに対し、西軍は毛利軍を主とする総勢1万5000人。援軍ありきの籠城でした。

9月8日、西軍は大津城の弱点を見いだします。大津城を見下ろすことができる長等山から城内めがけて砲撃を繰り返したのでした。それでも高次軍は、よくしのぎ、陥落には至りませんでした。

9月13日、西軍は城の外堀を埋め、それを足掛かりに三の丸、さらには二の丸へと攻め込み、本丸を残すのみとな

## 大津籠城戦



現在の彦根城天守の前身とされる大津城天守の推定復元図

りました。そこで、援軍が来ず孤立してしまった高次は和ヶ原の合戦の趨勢に多少なり睦に応じ、翌日開城。天下分け目の戦いが関ヶ原で行われた9月15日の早朝に、高次らは兵を連れて城外へと退去したのでした。

この大津籠城戦によって、西軍1万5000人は事実上の足止めを食らってしまった

り防御しにくい点があることから、翌慶長6(1601)年に膳所へと移されることになりました。廃城後の本丸跡には代官所・幕府蔵が建てられ、商業都市として再生していくのでした。

なお、『井伊年譜』によると、大津城の天守は西軍からの総攻撃を受けたにもかかわらず落ちなかったことがめでたいとして、徳川家康が彦根城に移築するよう指示したといわれています。

ところ、長等山からの砲撃を受け、本丸以外の建物が大破した大津城はどのようになったのでしょうか。

至近距離から打ち下ろしの砲撃を受けやすい立地、つまり

昭和32年から35年にかけて行われた彦根城天守の解体修理では、古材の形からかつての大津城の天守を復元することができました。

壮絶な籠城戦を生き抜いた大津城天守は、いまなお彦根城天守の中で生き続けているのです。

(滋賀県文化財保護協会 畑中英二)

## 天下分け目の合戦左右